

建設班 二期生 二宮賢一郎

現在大人からよく耳にする事は、「百姓は、現金収入が非常に少ない。今の様なやり方では、今後尚一層生活が苦しくなつて来る。」と言う事だ。

どうして、こんなに困つて来たのだらう。戦後農業技術も発達して来たし、昔と比べて生活が楽になるはずだが、……然し考えて見ると、現在本村の農業状態は、昔とあまり変りがないように思えます。本村は、全土の八割以上が山林です。この様な山村で、米麦を中心とした経営では、なりたぬが本当だと思ひます。

こゝで私は考えるのですが、全村の八割以上も森林で有りますので、林業に力を入れ、又適地で有ります柿、栗、等の果樹栽培の方向へ力を入れなければ、いけない時期が来たと思ひます。

特に現在畑作が悪いので、特に山畑等には、柿、又栗を植え果樹に切り変えて行きたいと思ひます。然し果樹（特に柿）は、他の物より非常に共同性が必要です。

例えば、消毒を行うにしても、出荷するにしても、個人個人が別々に行つてゐるようでは決してうまく行きません。

先日、内子町字五城の和田部落へ柿園の視察に行きました。この部落も以前は、養蚕、タバコ等をやつて居たそうですが、このまゝで居ては、今後生活に困つて来るので適地である柿に力を入れて来たそうです。現在栽培戸数七五戸、栽培面積二四〇反、年間生産高が三万四千貫も上げて居ります。

更に畑を柿園に切り変えて年々増反して行く状態で、現在協同果樹場も出来て、立派な果樹を中心とした、農業経営の方向へ動いて居るようです。

牝川村の場合も、柿、栗に於いては適地でも有り、大いに力を入れて、果樹を取り入れた、農業経営の方向へ持つて行くならば、現在より一段と安定した生活が出来ると思ひます。私は、建設班に入班し考えた事は、村の端々から今後、農業に従事する青年が寄り集まつて、同じかまの飯を食い、昼は作業、夜は学習にて、団体生活を送つて行く中に、目に見えないがいつの間にか、皆んなの気持がびつたり

と合つて来た、これが更に拡がつて、村全体の人の気持がびつたりと揃つて一つの目標に向つて進み始めたとき、本當の村づくりができて来るのだと思ふ。

### 自分の職業に

#### 自信を持つて

建設班 二期生 楠野仁志

職業に卑しい職業はないと言われる今日の世でも「百姓」と言えば、軽視する人が少なくない。

終戦後の食糧難には、「お米さん、お百姓さん」で尊ばれ、食糧の豊富に出来た今日では、「百姓は馬鹿がやる仕事だ」と言う昔の言葉がまだ出て居るようだ。今からの農業は、作物の性質、肥料の配合又は農機具の知識、あるいは技術が必要であると思ふ。本村にも新しい村造りを目的とする。農村青年建設班が昨年設置された。そこで私達は少しでも、農業の知識、技術を身につけて、「馬鹿」では真似の出来ない百姓をするために、第一期の人達に負けない意志と抱負を抱いて、この農建班に第二期生として入班した。

農建班が設置されて以来、賛否両論いろいろ批判され又誤解され悪宣伝も飛んでいたが、私達はそれにも屈せず、毎朝五時半ヘルを合図に起床、それから体操、夜は夕食後学習、十時消灯と規律正しい生活をして居る。

皆んなで一つ屋根の下に住み、同じものを喰ひ、又一サヤの唐キビ、一つの力キも分け合つて食べ、作業の時は皆んなで力を貸し合つて協力し合う集団生活は大変楽しいものである。特に最近では農村青年の中に「百姓は嫌だ」と農業を嫌う声を度々聞く。嫌う原因は何であらうか？

日曜休日のない百姓、又朝は朝星、夜は夜星を仰いで毎日去年と同じ仕事をして喰つて寝るのは昔の百姓だと思ふ。今後の時代を背負う我々農村青年は、「今からの百姓は馬鹿では出来ない」と言う自分の職業に自信と希望を持つて、この後多勢の仲間が三期、四期とこの農建班に入班して戴く事を切望する。私達班員は、少しでもよい村を作つて行くために終了後も更にお互い協力して、進んで行く決意を新たにしておる。